

製品化・実用化  
事例人材育成  
技術相談  
共同研究  
研究会笠間焼を未来へつなぐ～スキルアップ  
研修で製品づくり支援～

## 支援先

なかむら陶房、一陶、佐川義乱、関雄太、スタジオ・オーク、白川健一、李志杰、李愛琳

## 【背景】

笠間陶芸大学校では、陶磁器成形技術や釉薬技術など、笠間焼の窯元や陶芸家からの様々な技術相談に対応しています。相談内容に応じて陶芸技術者専門研修によるスキルアップや企業連携のコーディネートなどを実施し、課題解決や新製品開発を支援しています。

ここでは支援の結果、令和7年に製品化された事例を紹介します。

## 【支援内容】



図1 個展での新作



図2 深鉢

## &lt;事例① なかむら陶房（中村富夫）&gt;

中村氏は、ユニバーサルデザインを意識した食器のほか、茶香炉、陶板など幅広い商品を手掛けています。令和7年春に新作発表に向け、白マット釉の開発について相談があり、当校の釉薬データを活用し、白マット釉の原料配合を提案しました。また黒マット釉を下地にした「網目模様」を美しく出すための、最適な配合比と製造条件を支援しました。

その結果、令和7年3月、都内の個展で新作発表につながりました。（図1）

同年4月の「陶炎祭（ひまつり）」にて、新釉薬を全面に施した新商品の販売を開始しました。

支援項目：令和6-7年度 技術相談

製品例（図2）：深鉢（税込10,000円）

## &lt;事例② 一陶（佐藤剛）&gt;

令和5-6年度、笠間焼協同組合と当校は知名度の高い「笠間の栗」の灰（栗木の剪定枝の焼却灰）を釉薬原料として利用するため共同研究を行いました。佐藤氏は、笠間の粘土と伝統的な釉薬にこだわり、笠間焼らしさに取り組む人気作家のひとりで、組合員として共同研究の中心的な役割を担いました。

この栗灰を活用し、工程を変えずに不良品を出さない安定した釉薬を作りたいとの要望があり、栗灰の前処理方法や、原料として使用する際の注意点などのノウハウ提供を行い、さらに下地性状の調整方法、発色や表情のバリエーションを出すための支援を行いました。

令和7年8月、笠間市の「回廊ギャラリー門」にて、栗灰釉を用いた製品の販売を開始しました。



図3 笠間色四方台皿

支援項目：令和5-6年度共同研究、令和7年度研究会・技術相談  
製品例（図3）：笠間色四方台皿（税込6,600円）



図4 スクエアボウルL



図5 ボウルS

### <事例③ 佐川義乱>

佐川氏は、笠間産素地にスリップウェア（化粧土と呼ばれる液状の粘土で素地に装飾する技法）を得意としています。令和7年4月から笠間長石ブランディング研究会に参加し会員として活動する中で、栗灰を使用した釉薬を用いて、従来の作風を損ねることなく違和感や欠陥を発生させない新作を発表したいとの相談を受け、スリップウェアに適した釉薬の条件や、作風を維持するための焼成条件に最適化などの支援を行いました。

令和7年秋、笠間長石と栗灰を併用した釉薬を用いた製品が、笠間市内イベントでの販売や「回廊ギャラリー門」での常設販売にもつながりました。

支援項目：令和7年度 研究会・技術相談

製品例（図4）：スクエアボウルL（税込6,050円）

（図5）：ボウルS（税込2,750円）

### <事例④ 関雄太>

関氏は、イベント出店やグループ展などを経験する中で、作品の幅を広げるため、独特の質感を持つ「チタンマット釉」の表現を追求したいという相談を受け、令和7年7月～10月の専門研修を通じ、目標の質感を得るための調合や焼成実験などの技術支援を行いました。

研修修了後も試作を継続支援し、製品化を後押ししました。

令和7年10月31日～11月3日のイベント「陶とくらし」で、チタンマット釉製品の新作販売を行い、他県内イベントや市内ギャラリーのポップアップ展でも展開し、現在は常設販売を目指しています。



図6 ぐい呑み、花器

支援項目：令和7年度 陶芸技術者専門研修

製品例（図6）：ぐい呑み（税込1,600円）

花器（税込11,000円）

### <事例⑤ スタジオ・オーク>

人気作家である大貫博之氏が運営するスタジオ・オークでは、生産性向上を目的とし、スタジオスタッフの技術向上に力を入れています。そこでスタッフへのろくろ成形技術支援の要望があり、専門研修を実施しました。

研修後には、受講したスタッフ自身が手掛ける工房内の新規ブランド『由亀(Yuuki)』が立ち上げられました。令和7年の笠間の陶炎祭(4/29～5/5)では、普段使いの食器などを試験販売し、期間中約30万円の売上を達成し好評を得ました。今後は販売店との定期的な取引を計画しており、販路拡大を目指しています。



図7 由亀(Yuuki)  
ブランド

支援項目：令和6年度 陶芸技術者専門研修

製品例（図7）：飯碗（税込3,300円）ほか



図8 販売風景

<事例⑥ 器ノ新島白川（白川健一）>

作家である新島氏は共同経営者として新たに白川氏を迎え入れ、「器ノ新島白川」を立ち上げました。それに伴い白川氏の陶芸技術指導について相談を受け、当校では、8ヶ月間の専門研修を通じ、ろくろ成形技術などを基礎から集中的に指導しました。

現在は研修で習得した技術を活かし、白川氏単独ブランド製品として笠間市内販売店や陶器市などで販売しております。今後は県内外での展示会を予定しています。

支援項目：令和6年度 陶芸技術者専門研修

製品例（図8）：中皿（税込2,200～4,400円）



図9 お茶碗製品  
（大小）

<事例⑦ 李志杰>

李氏は、これまで石膏型によるデザイン性の高い製品づくりを行ってききましたが、今後の製品展開に幅を持たせるために、ろくろ成形技術を習得し、新しい製品づくりを目指したいとのことから、成形技術の指導について当校に相談がありました。当校では専門研修を通じて、ろくろ成形技術の習得指導を実施しました。

研修により、より細やかな成形が可能となり、シンプルで繊細な新しい茶碗製品が誕生し、令和7年の笠間の陶炎祭(4/29～5/5)で販売し好評を得ました。

支援項目：令和6年度 陶芸技術者専門研修

製品例（図9）：お茶碗（税込1,650～2,750円）



図10 真鍮取手付きポット

<事例⑧ 李愛琳>

李氏はデザイン性の高い磁器製品を製造しています。従来品に異素材のハンドル（取手）を組み合わせたポット製造に取り組むため、素材選定や加工・取り付け技術について相談がありました。

ハンドル素材として植物製、金属製及び樹脂製など素材毎の特性を解説し、デザイン性と加工性の高さから真鍮の利用を提案しました。また本体形状に合わせたハンドルのデザイン（サイズ・形状・バランス性、グリップ性）をアドバイスし、ポット本体の蓋の動作確認など、機能向上に向けた詳細な指導を実施しました。

令和7年に京成百貨店や笠間工芸の丘で展示販売を行い、一点ずつ形状・表情が異なる製品のため希少性が評価され好評を得ました。

支援項目：令和7年度 技術相談

製品例（図10）：ポット（税込16,500円～）

担当

笠間陶芸大学校  
窯業技術グループ  
陶芸人材グループ

尾形 尚子、吉田 博和  
常世田 茂、根本 達志、新島 佐知子

TEL:0296-72-0316